

第4章 都市づくりの目標

基本理念の実現を図るために、県土の骨格を3つのゾーンと2つの軸で捉えて、都市づくりの目標を示す。

4.1 県土の骨格

本県は、平地や谷あいの主要な交通軸上に連続して集積する「まち」ゾーン、4つの平を中心に農地を主とする「里」ゾーン、国立公園や国定公園の指定地域を中心とした「山」ゾーンの3つに区分でき、この「まち」、「里」、「山」の各ゾーンを交通軸や河川軸が貫くかたちで県土の骨格は形成されている。

また県民の生活圏は、商圈・通勤圏からみると概ね10の圏域に分けることができ、各圏域に、それぞれ「まち」、「里」、「山」の3つのゾーンがある。

交通は各ゾーンや圏域に分散して存在する観光地を結び、複数の圏域にまたがる観光エリアを形成している。本県における都市づくりは、こうした県土の骨格や地理的なまとまりを踏まえて考える必要がある。

そのため、第1に、3つのゾーンを保全・活用するため、各ゾーンの明確化とゾーン同士の共生を目指す。

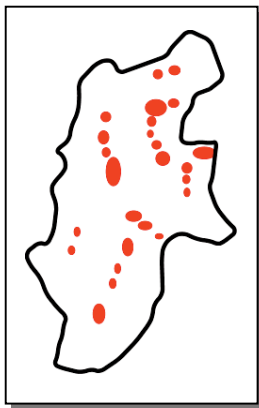
第2に、圏域内の連携はもとより、観光エリアや流域など圏域を超えた枠組みにおける都市づくりの連携の構築を図るため、交通軸に加えて、主要河川からなる河川軸も県土の骨格として重視し、これら2つの軸の特性を踏まえ、多彩な連携を生み出す。

これにより、環境と共生した多様な暮らしを支え、地域に根差した産業を育み、県土の多彩な“光”を磨いて、基本理念の実現を図っていく。

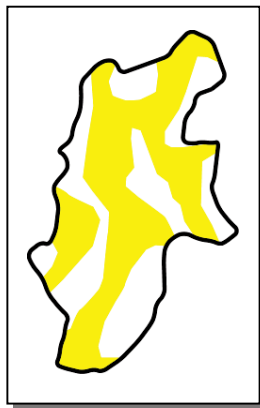


県土の成り立ち

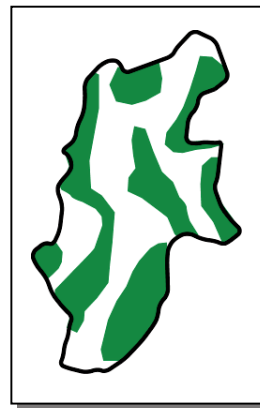
3つのゾーンの明確化と共生



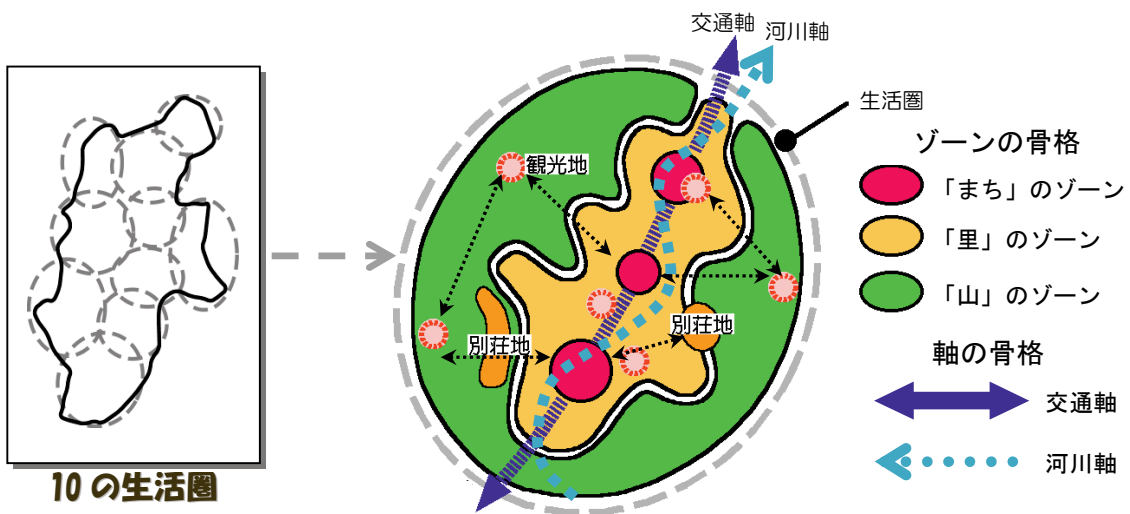
「まち」ゾーン



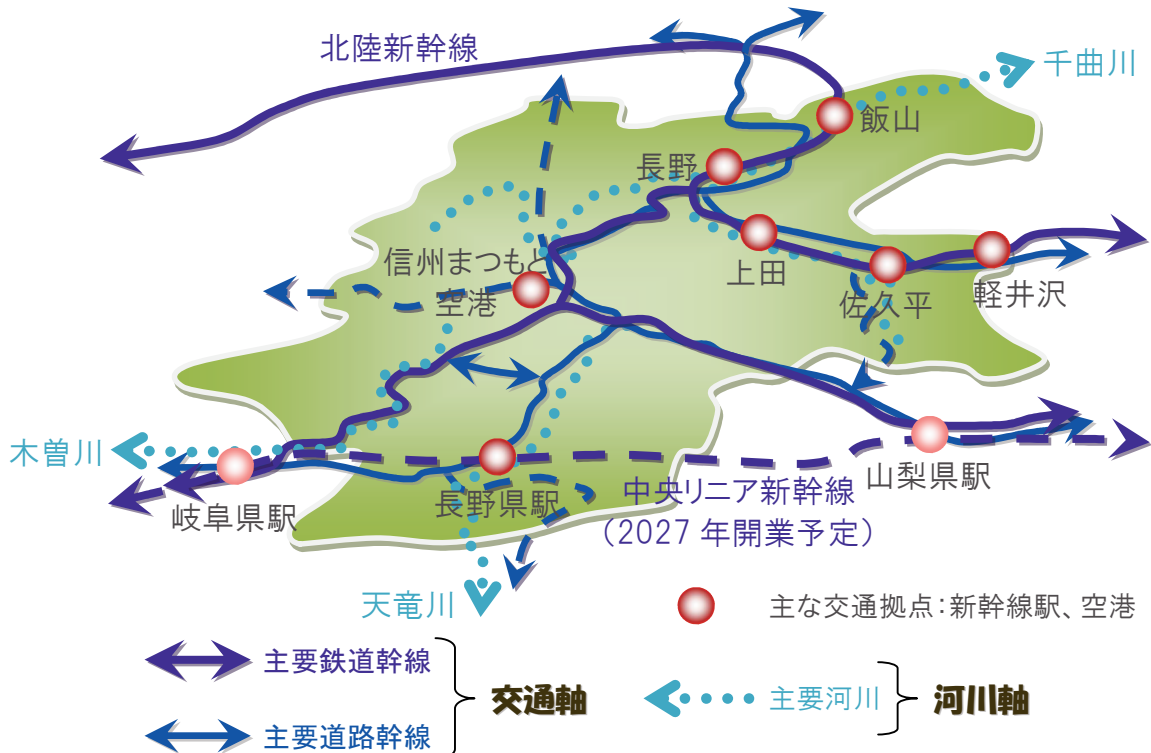
「里」ゾーン



「山」ゾーン



2つの軸による多彩な連携



自分の住む環境を慈しみ、誇りを持つ続けられる地域づくり
 ～縁が結う「まち」・「里」・「山」～

4.2 3つのゾーンの明確化と共生

(1) 各ゾーンの目標像

「まち」、「里」、「山」の3つのゾーンの目標像を示し、県土の骨格を強固なものにしていくために、各ゾーンの明確化を図る。

◆ コンパクトな「まち」づくり

「まち」ゾーンは、商業が低迷し活力の減退が見られるなかで、近年の少子高齢・人口減少社会の到来に伴う空き家や空き地の増加により、地域全体の衰退も懸念されている。

そうしたなかで今後は、これまで形成してきた都市インフラのほか、まちなかの資源を掘り起し、居住地・来訪地として魅力ある市街地としての再生を図るために、コンパクトなまとまりを保ちながら、その中に多様な世代や地域内外の人々が行き交い交流する接点をつくり、賑わいや文化の生まれる「まち」ゾーンの形成を目指す。

◆ 美しい「里」づくり

「里」ゾーンは、美しい田園景観や豊かな自然環境を背景にして、人と自然の調和した暮らしを生み出してきた。しかし、農林業の継承が困難な時代を迎え、無秩序な郊外化は、農山村の魅力ある風景や環境を少なからず悪化させてきた。

近年は、空き家や空き地の増加、農地・林地の管理不足による荒廃化などの課題も顕在化し、今後は、都市住民と一体となって、本県が貴重な地域資産として位置付ける豊かで美しい農山村風景の保全・継承をし、味わいのある美しい「里」ゾーンの形成を目指す。

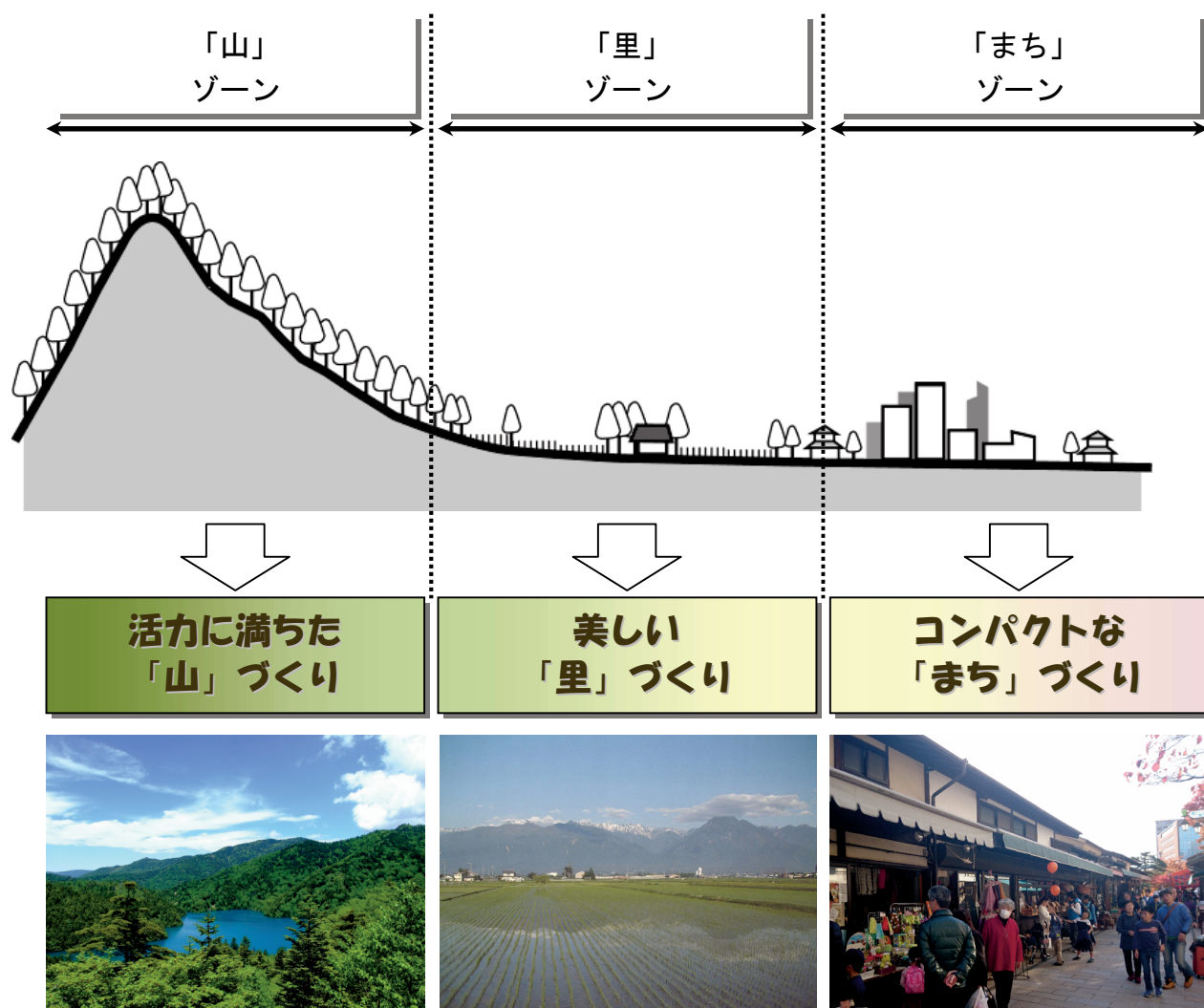
◆ 活力に満ちた「山」づくり

「山」ゾーンは、生態系の保全や水資源の供給、災害の防止など、人々の暮らしや産業を守る多面的機能を有し、こうした機能を維持できるよう適切な保全を図っていく必要がある。一方で、木材や林産物、エネルギーなど豊かな生活や産業・伝統文化に必要な資源を生産・供給する場であるとともに、温泉やスキー場など観光地として、県内外の人々が自然環境の魅力を味わえる空間も提供しており、これを積極的に利活用していくことも求められる。

そうしたなかで今後は、とくに観光面で、近年の国内外の観光動向や形態の変化も踏まえ、優れた自然観光地としてより洗練された魅力を醸成し、活力に満ちた恵み豊かな「山」ゾーンの形成を目指す。

3つのゾーンと定義

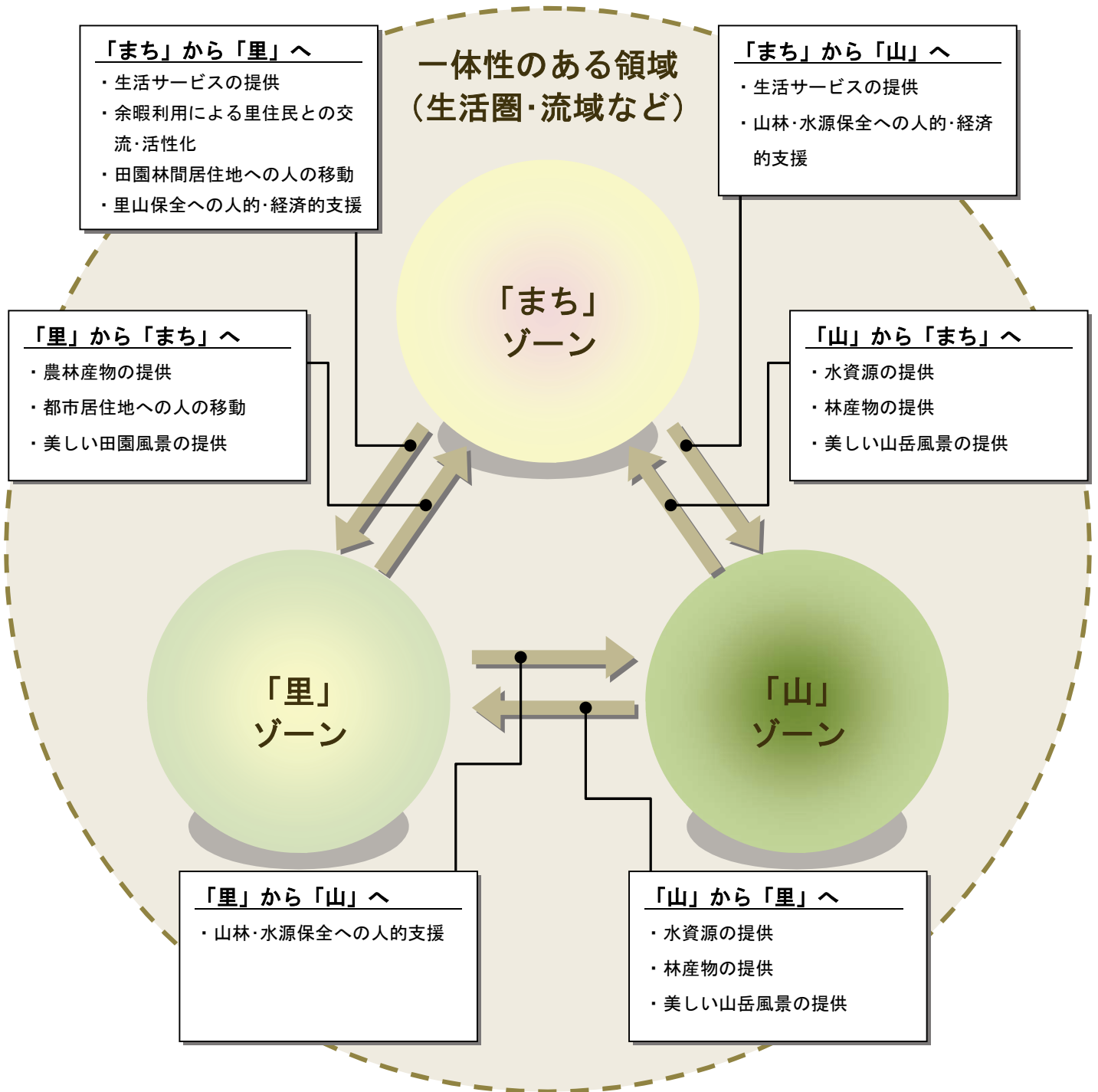
ゾーン	定義
「まち」	○主に既成市街地及び地域の中心となる生活機能等の集積のある集落地の区域。都市計画区域内の市街化区域又は用途地域の区域及びそれ以外の大規模な集落地域。
「里」	○扇状地、高原地、山間地の農業地・集落地及び一部の森林地域。農用地区域及び民有林の一部及びそれ以外の集落地等の地域。
「山」	○主に山岳地で貴重な自然環境を有し、水源地としての役割を担う森林地域。自然公園区域、自然環境地域、保安林、民有林等を主体とする地域。



3つのゾーンの目標像

(2) 各ゾーンの相互関係

本県が目指す都市づくりは、一体性のある領域（生活圏や流域など）のなかで、各ゾーンが、それぞれの特質に応じた方針や手法で持続可能なゾーン形成を目指すとともに、各ゾーンが密接かつ有機的につながり、それぞれの機能や魅力を相互に補完し合う共生関係を築きながら、都市づくりを進めていく。



3つのゾーンの相互関係

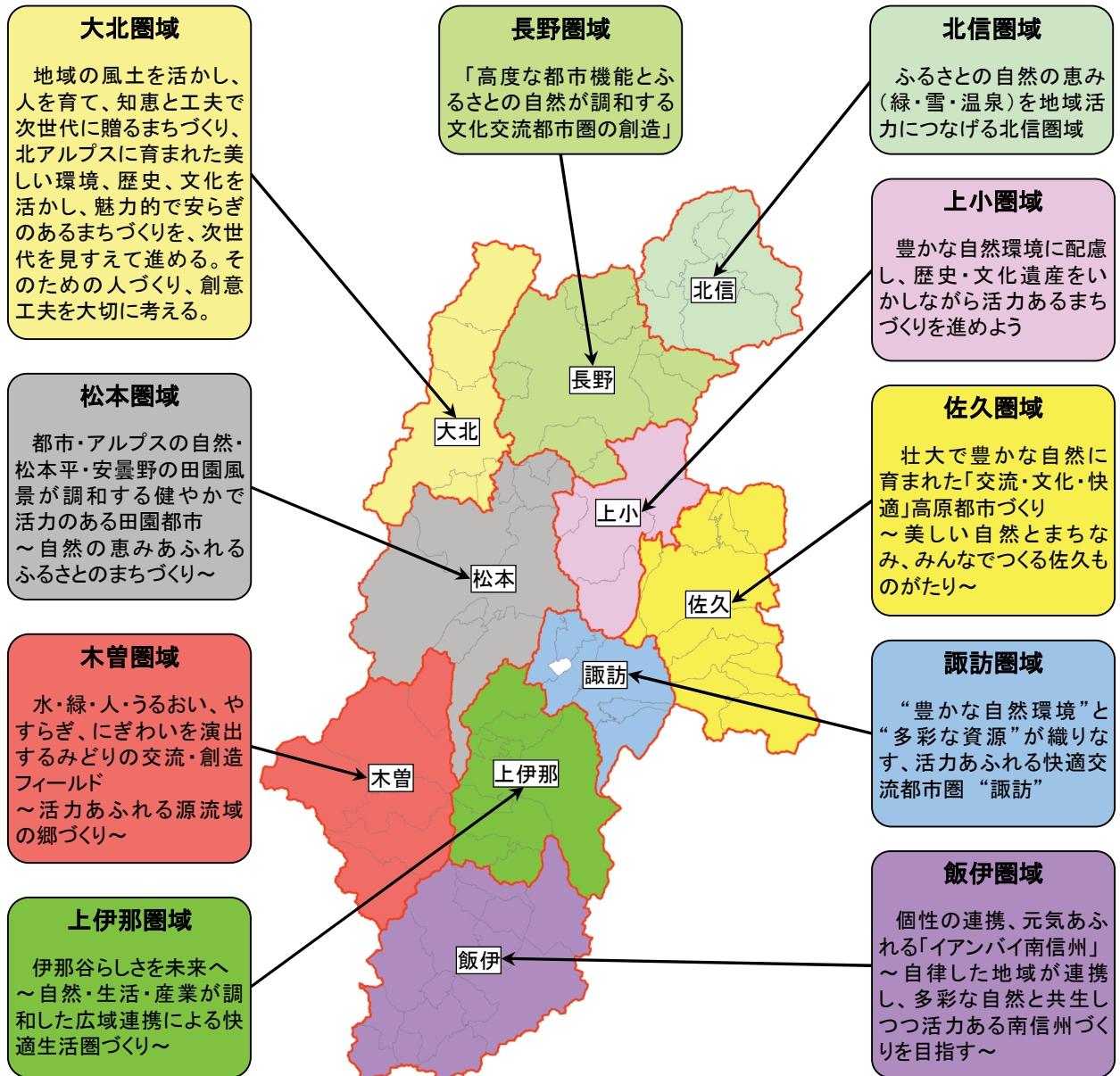
4.3 2つの軸による多彩な連携

(1) 生活圏単位でのビジョンの共有

本県において、生活圏単位の10圏域は、都市づくりの計画単位としての一体性に妥当性を有する領域の一つである。前回の県ビジョン策定時には、圏域マスタープランを策定し、広域的な連携を図るうえでの有効な枠組みとして機能してきた。

各圏域には、中心的な「まち」と一体性を有する「里」、「山」がそれぞれにあるが、中心的な都市の規模や数、平地の広さや起伏はそれぞれ異なり、緯度や標高も異なることから、本県の地域の多様性を担保している領域の一つとして捉えることもできる。

今後の都市づくりも、この圏域単位での計画性を重視し、都市間相互の連携強化を図りながら都市づくりを進めていくことが望ましい。その際、圏域ごとの基本理念や方針のみならず、今後は、都市づくりの具体的な施策についても、同一圏域内で調整を図り、整合性のとれた都市づくりを目指していく。



圏域区分と各圏域の都市づくりの方向性※

※平成16年5月に策定された各圏域ビジョンに示された都市づくりの方向性

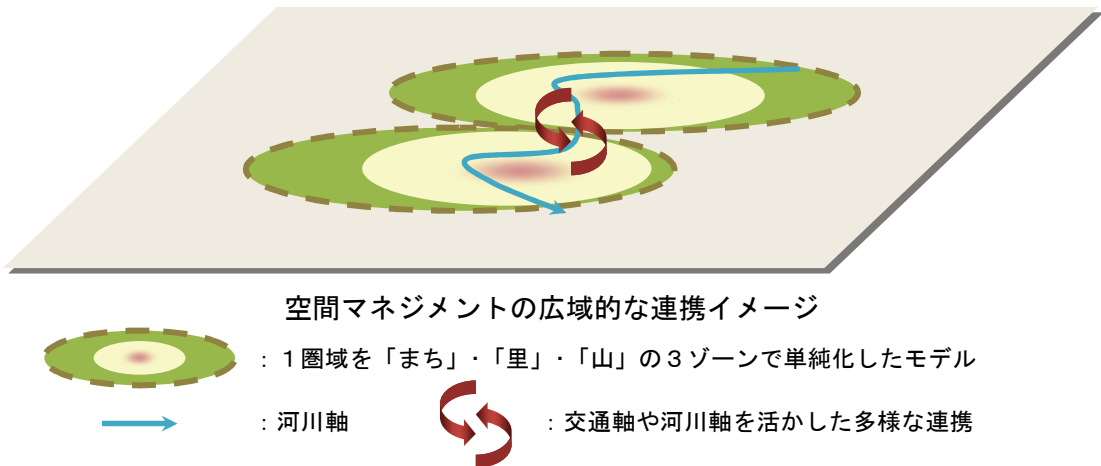
(2) より広域的な都市づくりの連携とネットワークの強化

近年の高速交通網の発達や ICT 技術の進歩により、人々の行動圏は、既存の生活圏にとらわれず、多彩な広がりをみせている。市町村合併の進展を受け、改定の視点として見出した「広域連携の深化」や、県土の骨格として位置付けた「2つの県土軸」を踏まえて、圏域を超えた都市づくりの連携とネットワークの強化を図る。

◆ 空間マネジメントの広域的な連携

異なる圏域でも、「里」ゾーンが連続し、土地利用の規制レベルが異なると、開発圧力が相互に影響し合い、人口の移動も起こりやすい。持続可能な都市づくりを進めていくうえで、複数の圏域が生活面で実質的に一体性を有している場合には、圏域の枠組みにとられない連携が不可欠になる。

したがって、「まち」や「里」ゾーンで地形的に連続性のある圏域同士の土地利用の規制レベルの整合や、都市施設の整備や再配置、統廃合、交通体系など、多様な空間マネジメントにおいて密接に連携した都市づくりを目指す。



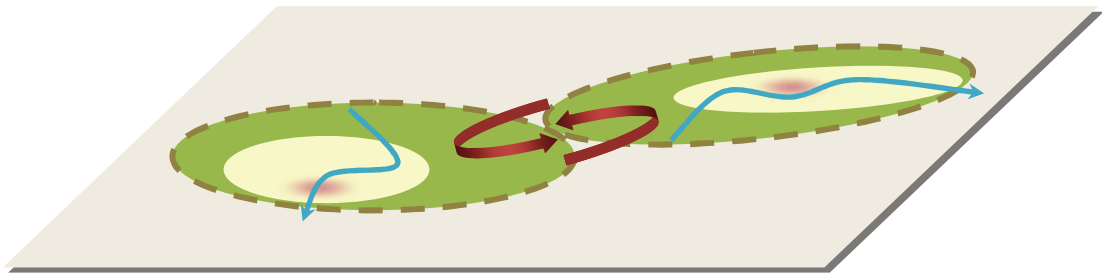
◆ 産業・生活の広域ネットワークの再構築

10 圏域は交通軸で相互に結ばれているが、隣接する圏域間でも、物流や人々の結び付きの程度に差がある。例えば、「山」ゾーンの部分だけで隣接している圏域間と「里」ゾーンで長く境界を接している圏域間ではその差は大きい。

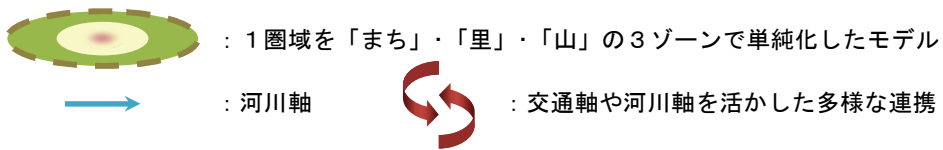
しかしながら、「山」ゾーンの部分だけで隣接している圏域間は地形的な分断により固有の風土・文化の多様性が育まれてきた一方で、道路や鉄道などの交通軸を活かして異なる風土・文化を有する圏域間が結ばれることで、観光面では魅力的な周遊ルートの創出に、産業面では、生産地同士の結び付きが強まることで新たなブランド形成や、消費地と生産地のマッチングによる物流活性化につながる可能性もある。さらに生活面では、「里」ゾーンの居住地から別圏域の「まち」ゾーンへのアクセス性の向上により通勤・通学、通院、買い物などの利便性も高まる。安全・安心の面では、大規模な災害が発生した場合、地形特性の異なる圏域間などでは被害の程度が異なり、災害発生後の支援・復旧の相互支援体制の強化にもつながる。

したがって、「山」ゾーンで地形的に隔たりのある圏域間や隣接県との間でも、既存の交通軸等を活かし、特に産業・生活面で幅広い分野における多機能な広域ネットワークの構築を目指す。なお、圏域間を結ぶ新たな道路等の整備については、自然環境や地

域の暮らし・産業に及ぼす影響を十分に考慮したうえで、その必要性を慎重に判断することが求められる。



物流・交流の広域ネットワークの再構築イメージ

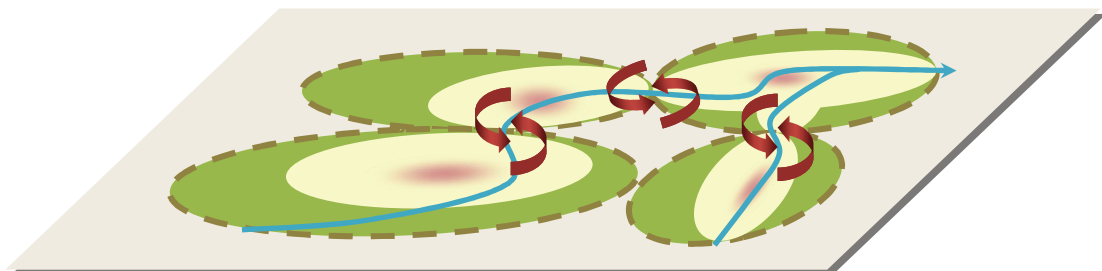


◆ 水と緑の流域ネットワークの形成

本県の10圏域に水系を重ねてみると、複数の圏域が一体的な流域を形成していることがわかる。流域は一つのまとまりをもった環境とし生態系や、上流部と下流部で利水・治水の面で密接な関係にあるだけでなく、かつての水運や河川沿いに発達してきた街道によって社会的にもつながり、食文化など特色ある流域文化を形成してきた。

また流域は、グリーンインフラを展開する枠組みとして、森林や農地による防災・減災機能など様々な生態系サービスの保全・活用、文化的景観の保全・育成を図る上での妥当な計画単位と捉えることができる。

したがって、流域内の住民・市町村同士が、河川軸により上流部に向かって派生的につながり互いに影響し合う領域への意識を高め、水と緑を基軸に有機的な連携を深めることによって、流域の文化・景観を継承・育成できる都市づくりを目指す。



水と緑の流域ネットワークの形成イメージ

